

第1777回（3月9日）

農業生活とネットワーク

（奈良女子大学）秋 津 元 輝

本報告は、これまでの農村社会学のようにイエやムラではなく、農業者個人を単位とみて、その人間関係に焦点をあてる。集団を形成せず、個人中心的、選択的であるような人間関係の新しい動きを、ネットワーク概念の適用により捉えようとするのである。具体的には、農業者のつきあい関係のなかに、主体の自由度に幅のある新しい行動とイエ・ムラの枠内でおさまる伝統的な行動との、対抗と連続の二面を見出そうというのである。

最初の3つの章は、近畿の水田村落を中心とした調査研究である。第1章では、個人ベースのネットワーク的つきあい関係が、村落構造に取り込まれて、その根強さの一要因になっている、と指摘する。第2章では、村落組織が水田所有世帯を中心に運営され、その運営面に実際の農業者が携わる度合いが増すことで、農業水利は個々の意欲的な農業者にとってかつてより操作性の高いものになりつつある、と指摘する。第3章では、大規模借地稲作農も拡大の初期には、自己のネットワーク的人間関係（とくに親類）を利用するが、規模拡大にともない市場取引ベースの他人どうしの貸借が進むという耕地規模拡大の社会過程を追う。

第4、5章では、条件不利地域から一大施設園芸産地へとドラスティックな転換をとげた愛知県渥美半島の成功要因を検討する。それは、1つに豊川用水の開通や農業構造改善事業の集中的導入に端的に示される国家基盤整備事業の遂行である。2つに、もともと半農半漁地帯のため水田村落に比べ共同規制が弱く、その分だけ新しいものへの転換が容易だったという社会関係である。次に、当地のつきあい関係を精査し、3つの位相で捉えている。伝統的な親族・地縁的關係、フォー

ルな経済的組織、年齢階梯組織、の3つである。そのうち年齢階梯のつきあい関係は、ある程度個人の選択により形成可能なネットワークとしての性格をもっていて、それは経済上の情報伝達機能と娯楽などの生活機能をあわせもっている。そのため、前の2つの相を媒介する役割を果たしている。

第6章では、農業の新規参入者の大部分は農業を生産だけでなく販売も含めて捉えて、従前に培った村落を越えた個人的なネットワークを利用しつつ営農しており、その行動様式は個人主義的・自己完結的である、と指摘する。また第7章で、韓国の農民が村落を越えるつきあい関係のネットワークを利用しつつ農業生活を営んでいること、そのネットワークが伝統的社会に仕込まれている点が、日本の新規参入者との違いである、と指摘する。

終章において、次のように総括する。1つに、村落のもつ意義は水田地域に大きく、施設園芸地域において小さい。ただ、施設園芸地域において、伝統的な年齢原理にもとづく中間的組織が成立し、人間関係を潤滑にし、経済・技術面での情報交換にも役立っていた。2つに、新規参入者にみられるような、1つの職業として農業を選択し、自己中心のネットワークに支えられつつ生産から販売活動までを担っている、新しいタイプの農業者の出現である。現在地域には、主体性を重視する新しい農業者が伝統的な規範や社会システムと相克・継承しながら経済活動につき、形成されつつある。

（文責・相川良彦）